

一月のテーマ

自覚

自分の 名前から

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれ話を掲載します。



え・たむらかずみ

留

吉という名前の人がいた。彼は自分の名前に不満をもって、彼の父親は五人の子をなしたので、もうこれで最後に止めておこうと、こうした名前をつけたと聞かされたが、なんとつまらないことだろう。

せっかく仕事を始めても、「もうこれで止め」という声が聞こえてくるような気がする。飽きっぽい、長続きしない、そうした中途半端な気分になるような感じをもっていた。

だが、こうした留吉の人生にも、大きな転換期がきた。それはある雑誌を読んで、彼が自分の名前について、大変な考えがいをしていたと悟った時からだ。

一、子を愛さない親はいない。親は自分に幸あれかしと念じながら名前をつけた。

二、子は親の真意をおしはかり、たとえ気にいらぬような点があっても、それをよく解釈して自覚を新たにしていけば、その名前のように人生を有意義にすることができる。

こうした意味のことがらがその雑誌に書かれていたのだ。留吉はなる

ほどと思った。そして新しく思い直した。トメは仕事を途中でやめるのではなく、わがままはここで止めという意味なのだ。わがままはすべてここで止めと、そのつど思い起こして、一貫不怠、やってやってやりぬくことだ。

このように気持ち新たに、「よい名前をつけてくれました」と毎朝晩、親に感謝しながら、仕事にかかるとなった。そうやっているうちに、飽きっぽくなるようなことはみじんもなくなり、毎日張り切って働けるようになった。今わがままが出ているな、これを止めようと彼は何かにつけて気づくことが多くなり、みちがえるような働き手に変わった。現在勤めている工場の係長に抜擢されることも、内定したという。

ここではつきり知っておきたいのは、名前を変えればよくなるというたような安易な考えでそれを実行しても、本当のところは無意味であるということだ。

大切なのは、あくまでも本人の自覚と努力である。自分の名前に対して親の愛情を思って感謝し、名前の

中に建設的な意義を見出だしてこれを自覚し、そのように努力すると、そこから自分の人生はそのとおりに切り開かれてくる。そこに親子の愛と敬とのつながりが、大きな力となって生きてくる。

二郎とか三郎とかの二、三は、ただ順序を示すだけで何の意味もないという。一応はそうだといえよう。しかし順序が示されてあるとは、すばらしいことではないか。その順序を重んじて、それにふさわしく立派に生きようとつとめるところに、見事な人生が開かれるのではないか。肝心なのは、たとえどのような名前であろうと、そこに親の愛情を見出だして自覚を新たに、意義のある人生を築こうと努力することである。

自分の名前から、明るさ、楽しさ、美しさ、面白さ、強さ、柔らかさなど、建設的なものを見出だすことができずばらしい。その人の人生は、そのとおりに輝かしいものとなる。あるいは地味な豊かさを、あるいは静かな落ち着きを、その名前のように人生は百花撩乱と咲き乱れているのである。 『丸山竹秋選集』より